

2023年2月発行

南埼玉地区は埼玉、神奈川、千葉の東京を囲む首都圏の13園が交流し合い、学びあっています。落ち着いてきたとはいえコロナ禍でどう交流や学習会を進めていくか悩みながら取り組むなかで、令和4年度も交流はせずに年齢別部会を対面で始めようとなりました。昨年まではZoomを活用した部会に取り組みましたが、なかなか話が深まらないことも感じていました。今回は一年を通じて唯一行われた年齢別部会、給食部会、主任部会を紹介します。

0歳児部会 11月15日 どんぐり保育園にて

コロナ禍で集まれなかった3年間でしたが、今回は久しぶりにみんなで集まって議論することができました。どんぐり保育園のリズムを見たあとに、0歳児の食事風景を見させてもらいました。その後の学習会は「ヒトが人間になる」の読み合わせをしました。

あおいそら保育園が動画で食事風景を中心とした実践報告を行い、提案をもとに、フェイスシールド・マスクの話から口元や表情をみせる大切さを確認したり、咀嚼を促す食材の話（ごぼう、キャベツの芯、きゅうり、モロッコいんげん等）や描画について（いっぱいやもっとを引き出すために紙をどんどん替えて沢山描くこと）の話が議論されました。

また、「これが苦手(ここが弱い)から手立てを考える」という子どもの捉え方ではなく、子ども全体をとらえて自ら育つことを大切に一緒に生活するなかで意欲を引き出していくことが大切だと話し合いました。自我が芽生え食事の場面ではイヤイヤをする姿も出てくる時期ですが、発達や子どもの姿からよく学び一面的な見方、関わり方にならないよう共に学び続けていくことを確認した部会となりました。

1歳児部会 11月8日 わらしこ保育園にて

午前中は1歳児クラスの子どもたちの様子を見てもらいました。天気がよく比較的暖かい日だったので、子どもたちは庭に出て土や泥で思い思いに心ゆくまで遊んでいました。

午後は、事前アンケートをもとに、子どもの絵を並べて「子どもとのかかわり・保育について」「保護者とのコミュニケーションをどう深めていくか。」について、主に各園の状況を話し合いました。1歳児の自我や、月齢差についても話が多くありました。どうしても切り離せない「コロナ禍である」ということに苦心しつつも、各園が食べること・遊ぶことを大切に、工夫を続けている様子が感じ取れました。「絵について学びたかった」という希望に応えきれなかったので、課題としたいと思います。最後に保護者が抱える大変さを受け止めたうえで、子どもが安心して元気に保育園生活を送れるよう関係を作っていく大切なことを皆で確認し合いました。

2歳児部会 12月2日 こぐま保育園にて

・こぐま保育園の2歳児リズムを見学するはずだったが各園の感染症増加に伴い変更。園内には立ち入らず別施設で行う

午前：各園から職員学習に使っているお薦め本を紹介する

午後：各園から実践報告 描画を見ながら

コロナ禍になってから保育者の学習の場面も激減しました。

それでも目の前の子どもたちは欲求を表現し、経験が浅い保育者は見通しが持てずとも、応えてきたことでしょう。それは自分の為に子どもたちが居るのではなく、子どもたちの為に自分が居ると認識して保育者になったからだと思います。子どもたちを笑顔にしてあげられないことに苦しくなることもあったと思います。



今回の部会で経験が浅い保育者の意見に、学習が減ってしまった影響を感じました。ですが同時に熱意も凄く感じることができ、以前より少ない学習の機会になっていますが、この熱意によって向上していくことが想像できました。私も自分の保育を振り返り気が引き締まりました。リモートだとこんな気持ちにはなれないでの、改めて対面の価値を感じました。

3歳児部会 11月22日 どんぐりっこ保育園にて

著書「子どもの手づかみ食べはなぜ良いのか」の山口平八先生と対談している清水フサ子さんを迎えて学びました。

文献「斎藤公子の保育論」斎藤公子、井尻正二の中から子どもと絵の項目の読み合わせをして、子どもの絵は何を物語っているのか。各園の気になっている子について話し合いました。『子どもの想いは、願いは何だろうか』保育士は子どもの姿を問題視しやすいが、子どもの姿には無駄な物はない。すべて意味があるものとして捉える事が大事である。子どもの背景にあるもの、生育歴、生活リズムの食事、睡眠、家族のことなどしっかり把握できているかななどから話をすすめて話し合いました。

保育園から帰って、子どもの家の過ごし方などにも気にかけて、保護者の大変さもしっかり受け止めて、保護者と良い関係づくりをして保育する。「大変な子ほど、いっぱいかかえてあげなさい。」と清水フサ子さんの言葉がありました。

「3歳児は幼児期の青春時代」一生懸命に自己主張してみんなに見てもらいたい、認めてもらいたいと言う姿が語られて、3歳児の賢く頼もしく成長していることを確認が出来た部会でした。

4歳児部会 11月29日 つくしんぼ保育園にて

午前中は園見学とし、園庭や園周辺の森探検へ4歳児の子どもたちと行きました。午後は区民会館へ移動し、話し合いの時間を持ちました。各園、絵を持ち寄ってクラスの子どもたちの様子を伝えありました。『4歳児一秋葉英則・白石恵理子監修』を読み合わせましょうと資料を用意していました。

たが、部会交流が対面で持てなかった分、時間の許す限り自らの保育を語り、聴く時間としました。年長児へと向かっていく中で、焦りもあるかな、と想像していましたが、今の姿と一生懸命向き合っている担任の姿が伺えました。目の前の子どもは一人一人違いますが、保育や悩みを共有することは担任の力や励みに繋がっていると感じられる部会でした。

年長部会 9月27日・2月9日 やまばと保育園にて・染谷自治会館にて

他の年齢部会に先駆けて、9月27日1回目の年長部会を行いました。午前中は、やまばと保育園の歌やリズムの様子を見学し（本来なら一緒にやりたいところでしたが、コロナ禍のため見学のみ）、午後は、各園の年長担任と園長が参加して絵を見ながら話し合いました。

クラスの人数や障がい児、担任の保育歴などの基本的なことや、合宿や遠出のお出かけ、制作について等、事前アンケートをまとめたものをお互いに見た上での参加でした。

春から夏を経た中で、食育に力を入れている、ザリガニを一人一匹づつ飼っているなどのユニークな実践報告だけではなく、「子ども同士の関係が対等になっていない・自己表現が苦手・自信がない・当番をしない・話しを聞いていられない・就学に向けて親にどう伝えていったらいいか」等、様々な悩みに対して、質問が出たり、経験の長い園長がアドバイスや意見を出したりと、皆で考え合う貴重な時間となりました。

コロナ前のように子ども同士の交流ができなくなってしまっていますが、昨年は、リモートでの部会だったことを思うと、対面でお互いが顔を合わせて話し合うことができたことは、嬉しかったです。

二回目の年長部会は、絵を並べて各園の実践報告をしました。9月で話された悩みや取り組みのその後が報告されたり、卒園に向けた保育で何を大事にしているかなどが話されました。縄跳びを無くしてしまった男の子に対して、本人が新しい縄跳びを欲しいと言ってくるまで待とうとする担任の話については、困っていることを（本心を）言えない子もいる。保育者はその子の背景までも考えなければいけない、何でも言える関係作りがされていたのか、などの意見が出され、全体で考える機会としました。

卒園までまだ二ヵ月ある。そんな思いで明日からの保育に向かえる一日となりました。

給食部会 12月15日 つばめ保育園にて

今回、対面での部会が開催でき嬉しく思います。折角の対面なので具体的な交流が欲しいと思い、おやつの持ち寄りを提案しました。限られた条件ではありましたが、他園のおやつを試食することができて学びとなりました。

給食や離乳食についても幅広く話が聞けて勉強になりました。特に全園が分つき



米であることを知り、つばめでは7分つき米+押し麦にしました。お弁当の日が何のためにあるのか、離乳食の形状や硬さは担任と相談しながら進めないと、給食会議も深めたいなども共有できました。改めて目の前にいる子どもたちを真ん中に、おいしい給食・楽しい給食を提供できるように、ますます勉強しようと思いました。

主任部会 11月4日 つくし保育園にて

コロナ禍で3年ぶりの対面での部会ができる皆さんほっとしたような表情でこの間に感じていた事や聞きたいことなどが次々と話されていました。共通の保育観にたった安心感がやはり根底にある中での研修の為、対面での意義を改めて感じました。

- *コロナ禍での行事の工夫 父母対応での工夫についてまた、緩和してきているところなど
 - *正規職員とパート職員の保育観の連携をどうしているか…勤務時間内にパート職員会議を実施、パート職員も参加した全体の職員会議の実施など
 - *若い保育者について…評価の目を気にする為「子どもと同じ、大人も失敗してもいいんだよ」若い人が思ったことができる雰囲気づくりが大事
 - *この間雑談が少なくなってきたので職員間の対話を大事に
 - *加配が必要な子が増えている
 - *給食室の人間関係がむずかしい
- など、全体を見渡す立場の主任さんたちの悩みが沢山だされました。

* どんぐりさんの清水フサ子さんの話

母親ばかりに求めてはいけないが、信頼関係を崩さずに保育をどう伝えていくか？という話がでたときに、清水先生が言っていた話を聞きました。

「アンパンマンの何がいけないのか？思想？姿？形？安易に批判するだけではいけない。たたかうべきは商業主義の社会であって、親ではない。そこをどう伝えていくのか自分自身の力をつけていかないとならない。学習の場を絶やさないこと。その学習も決して強制はしてはいけない。悩んだ時に、答えを求めるのではなく、自分自身がこうだと思ったことが積み重なっていく。ひとり一人が立つことができる職員集団でありたい。」